

## 持続する志 二

### ―秋月悌次郎の「応懲日札」

はじめに

明治元年十月十八日、猪苗代謹慎中の会津藩主松平若狭守喜徳、前藩主松平肥後守容保ならびに将兵に、東京への呼び出し状が届いた。

松平 若狭

松平 肥後

右御用候条、東京へ罷り出候様。但し供人数は父子にて七人を限り。

萱野権兵衛

梶原平馬

内藤介右衛門

手代木直右衛門

秋月悌次郎

右五人の者、御用候条、一同東京へ罷り出候様。但し肥後始め護送の儀は、肥前藩へ仰せつけられ候事。

十月十八日申渡覚

諸月番

〔被仰聞之扣〕

これによって十月十九日、松平容保・喜徳および随従の藩士が、東京へ出発した。同行したのは、指名されている萱野権兵衛・梶原平馬・内藤介右衛門・手代木直右衛門等四名の外、山川大蔵・倉沢右兵衛・井深宅右衛門・丸山主水・浦川藤吾・山田貞介・馬島瑞園の七名である。この時、秋月悌次郎は密命を受けて越後に潜行していたため、同

行出来なかった。

十一月三日、一行は東京に到着、七日には松平容保をはじめ梶原平馬・手代木直右衛門・丸山主水・山田貞介・馬島瑞園は因幡藩主・池田慶徳の屋敷に、松平喜徳はじめ萱野権兵衛・内藤介右衛門・倉沢右兵衛・井深宅右衛門・浦川藤吾は久留米藩主・有馬頼咸の屋敷に幽閉された。十二月七日、朝廷は、この事件は家臣に重大な責任があるとして、家臣を重罰に処し、容保と喜徳に対しては死罪を有して永預けとするという詔書を下している。

その後十二月十二日に、謹慎中の藩士が改めて東京へ呼び出される。その中には、先の召喚時不在だった秋月悌次郎の名もあった。猪苗代から海老名郡治・井深茂右衛門・田中源之進・小森一貫斎・井深守之助・辰野源之丞・秋月悌次郎・春日郡吾・桃沢彦次郎、塩川から諏訪伊助・佐川官兵衛・相馬直澄・柳田新介が、滝沢村陣営に召喚され、翌日、彼らは東京に向けて出発した。

「応懲日札」は、この時呼び出された秋月悌次郎が、旅仕度を調べ、滝沢に結集し、東京に到着するまでの様子を記録した旅日記である。旧幕時代西国漫遊の旅をしていた悌次郎にとって、今回の旅は、これまでとは異なる意味を持つものであった。自由に行動していたかつての旅とは異なり、一挙手一投足に監視の目が光り、手洗いにまで護衛がついてくる。敗残の身で勝者の裁きを受けるための旅、「応懲」と

中西達治

という言葉が悌次郎のこの時の立場をよく表している。

命令が発せられた十二日の夜更けに猪苗代を出発、夜間の行軍で翌十三日午前四時過ぎ滝沢村会所に到着、塩川からのメンバーと共にそこを出発したのは、午前九時頃のことであった。以後、二十五日午後四時過ぎ千住に着き、その宿舎で最後のまとめをするまでの彼の行動が細かく記されている。

この記録の原典は失われているが、秋月悌次郎の第三郎胤家の養嗣子次三氏が、『秋月胤永謹慎中之消息 胤徳編』としてペン書きでこれを筆録しており、それが次三氏の後胤秋月孝眞家に残されている。<sup>注1</sup>

本稿では、次三氏が残された稿本を元に、秋月悌次郎の虜囚としての旅の様子を確かめたい。なお引用に当たっては、読者の便を考え、変体仮名を通用字体に改め、適宜句読点を施した。明治維新以前は、徳川幕府の下にあった各藩が、戊辰戦争をはさんで敵味方に分かれる。戦争の勝者と敗者は一体どのように向き合ったのか、戦後処理がどのように成されていったかが分かる、貴重な資料の一つであると云えよう。

# 一 猪苗代謹慎中の動静

余、本藩諸臣と同じく屏息の罪を猪苗代に待つ。已にして長州奥平謙輔旧知なるを以て、若松真竜寺の僧善順に托し書簡を贈れり。十月朔日受けてこれを読む。已に答書を草し、返し与ふることあらんとす。書以不<sub>レ</sub>尽<sub>レ</sub>言、答書を持し、潜行して謙輔が客次を新潟に訪ふ。実に十月七日払曉猪苗代を發して北越に至る。談了り十一月三日復たよく、猪苗代に帰ることを得たり。

十月十八日、我 老公当公と皆与に東京に召され、内藤・梶原二藩相、手代木氏・胤永四名亦特旨を以て同じく召さる。二公三子と已に登京せり。之より先 主上東京に幸するを以てなり。胤永脱走するを以て、登京の期を失し、已に猪苗代に帰り、官軍陣所

に執囚せらる。

全文の序である。開城直後猪苗代に謹慎していたときのことから書き起こし、奥平謙輔の手紙が届けられたとき藩の重臣らと協議の結果、密かに謙輔の元へ返書を届けたこと、十一月三日目的を果たして猪苗代に帰ったが、彼が越後に潜行していたとき、東京からの呼び出し状が届いており、藩公父子その他の藩士は即刻上京したが、彼は不在だったためそのままになっており、再度の召喚状を待つて他の藩士らと共に官軍の陣所の監視下に置かれていたことなど、おおよそこれまでの経過が先ず記される。当時官軍として彼らを監督していたのは、米沢藩の藩士であった。

時に米沢藩、官軍陣所を管轄し、その藩隊士日夜余輩を護衛す。余東京より再徴あらんことを待てども漠として消息なし。書を読み、詩を賦し、悠々以て日を送ること三旬余、米藩の隊長佐藤小左衛門等懇篤我を遇し、款語飲談、余亦その囚たるを忘る。隊士皆年少、余が字を需め、余が詩を乞ひ、侍坐吟誦、殆んど学塾師弟の看を為す。時に弟胤家亦猪苗代に在り、時に飲食品物を贈り、又時に余が囚居を来り訪ひ、友手を極はむ。友人長坂勝脩亦密かに文詩相贈答す。

悌次郎は、東京から再度呼び出されることを覚悟し、謹慎していたが、全く音沙汰なく三十日余りが過ぎた。この間彼は読書、詩作に日を送る。米沢藩の隊長佐藤小左衛門らが懇ろに彼を遇し、飲食を共にして、会話を楽しんでいることが分かる。猪苗代に集められた会津藩士を見張っていた若い米沢藩士らが、悌次郎の書を求め、詩を請うて、彼のまわりに座し、詩書を吟誦する様子は、彼のいうとおりまるで塾における師弟のようなありさまである。秋月一族では、この時弟の三郎胤家も同じように猪苗代に謹慎していたようで、時々飲食物などを届けたり、彼を訪ねてきたり、兄弟仲のよいことがよく分かる。

戊辰戦争後、会津若松地方が悲惨な状況に陥ったという証言はいくつかあるが、抑留されていた会津藩士達の境遇はそれほど知られていない。ここには、不自由、不如意はあったに違いないのだが、それにもかかわらず勝者と敗者の間に、平時と変わらぬ交流があったことが記されている。護衛兵に学問を教え、友人と詩を交わすなど詩人学者として知られていた悌次郎の面目躍如たるものがあるというべきだろう。

## 二 十二月十二日召喚状到着・即日滝沢へ

十二月十二日に至りて、海老名藩相・井深・田中両参政、小森一貫斎・井深守之進・辰野源之丞・春日郡吾・胤永の八名、即時に上程登京すべしと命ぜらる。余時に風疾に感じ、被<sup>か</sup>を被<sup>か</sup>りて臥す。命を奉じ、躍然として疾の身に在るを覚えざるなり。弟胤家、周旋行李を用意し、水島弁治贈るに言を以てす。古川春英薬を贈り、又フランクットを贈つて寒防に供す。余・井深参政・小森氏と疾夫なるを以て輿を用ゆることを得たり。

十二日二更猪苗代を發す。米沢士人余輩を護衛す。每人衛士三名或は四名、(余を衛る者は湯川宗次郎、勝野志摩之丞、野口栄三郎三名なり。皆忠篤謹慎、喫茶の瑣事に至るまで周旋給使、余輩を絶えて囚視することなし) 暁七ッ過滝沢村に至り、村民佐助が家に宿す。官軍慰勞して酒を贈る。諏訪・佐川二藩相、柳田新介亦召されしを以て、已に滝沢村に來り宿せり。米沢藩士曰く、これよりして、小倉藩兵隊士、君等を護衛して東京に至ると。

十二月十二日、召喚状が届いた。『会津戊辰戦争史』によれば、この時猪苗代謹慎中の藩士で召喚されたのは、海老名郡治・井深茂右衛門・田中源之進・小森一貫斎・井深守之進・辰野源之丞・秋月悌次郎・春日郡吾・桃沢彦次郎ら九名であったが、これとは別に、塩川謹慎中の藩士諏訪伊助・佐川官兵衛・相馬直登・柳田新介ら四名にも召

喚状が届いており、あわせて十三名が東京に送られるはずであった。ところが、この内桃沢彦次郎は病氣のため出発が遅れ、相馬直登は脱走して函館に赴いたため、実際に同行したのは、「応懲日札」に記された十一名ということになる。

たまたまこの時悌次郎は、風邪をひいて寝ていたが、命令を受けてしゃっきりしたという。弟胤家もこの時猪苗代にあり、兄のため旅行用の行李を用意するなどいろいろ手配している。同僚、友人らの別れの挨拶や餞別など、通常の旅立ちの様子と変わらないように見える。興味深いのは、贈り物の中に「フランクット」があることである。これは、いわゆる毛布のことだが、舶来品として明治開化期に一般化した言葉である。それが既にこの時期、会津藩士に重宝されていたのだ。会津藩も洋式兵練を取り入れており、こうした日常生活に用いられる輸入品がどのように普及していったかを考えさせるよい例といえるだろう。この時召喚された八名の内、井深・小森・悌次郎の三名は病氣中ということで、輿を使うことができたという。

召喚命令は即日実行された。午後十時頃猪苗代を出発して、十三日午前四時過ぎ滝沢村に到着という、素早い対応である。護衛したのは米沢藩士で、会津藩士一人にそれぞれ三名ないし四名の護衛がついている。悌次郎についたのは、湯川宗次郎・勝野志摩之丞・野口栄三郎の三名、誰もが真面目で礼儀正しく、お茶の手配に至るまできちんとこなし、会津藩士を囚人扱いはなかったとある。

酒を出して慰勞するなど滝沢村での官軍の対応は、至れり尽くせりである。米沢藩士の側には、会津藩士に対して特別の思いがあったはずで、そうした思いの一端がこうした対応に表れていると云えるだろう。ここには既に塩川謹慎中の諏訪伊助・佐川官兵衛・柳田新介らが来ていた。ここで彼らの身柄は、小倉藩士に引き渡された。

### 三 その後の経過

以下、「応懲日札」にしたがって、事態の経過を見てゆくことにする。

十二月十三日 午前九時頃、米沢藩士から小倉藩の護衛隊長に身柄を引き渡された十一名の会津藩士は、東京に向けて出発した。全員が輿に乗っている。隊長は伊東主馬助、会津藩士一名につき三名ないし四名の護衛がついている。彼らは小銃を携え、輿の旁らを肅々と進んでゆく。雪が少なく寒気が緩やかなため道はぬかるんでいたが、沓掛を過ぎる頃、はじめて道に積雪があった。原村からは輿を櫓に乗せての移動となっている。

午後八時頃福良に到着。夜食後伊東隊長が宿所に来て梯次郎らを慰勞する。

「私の所は、会津藩と格別に親交が深かった。あなた方を囚人として護送するのは忍びないことであるが、これも天皇の命令でやむを得ない次第である。自分らのことを気にしないで欲しい」。

この時は、諏訪・佐川・辰野・井深（守之進）・柳田・春日・梯次郎等七名が同宿している。その後同宿するメンバーは宿毎に異なっている。それぞれに護衛がつき、彼らは一晩中寝ずに警護を続け、便所浴室にも目を光らせていて、厳重な見張りの下に置かれている様子が分かる。

十二月十四日 前夜雪が降ったので、またその上に輿を乗せての出発である。今切からは歩いて勢至堂にて昼食。ここからは泥道が続く、皆そりを止めている。午後七時前、牧の内到着。この日はかなり強行軍だったことが分かる。ここでは、隊長が強行軍をねぎらったか、酒肴を振る舞っている。梯次郎はこれまで毎日服薬していたが、ここに来て少し回復の兆しが見えたとある。梯次郎の目は、同行する護衛の少年兵に向けられている。自分が虜囚として連行されていると

いうのに、南国九州育ちの十五、六歳の少年兵たちが、雪中行軍に悩んでいるのを見て、かわいそうだと同情しているのである。後年教育者としてその人格の高潔さを謳われる素地が見えるというべきだろうか。

十二月十五日 この日は、午前八時頃牧の内を出発、上小屋に到着して、諸氏と昼食。午後四時前白河着。白河は、戊辰戦争の際、会津藩士らが西軍との攻防戦を展開した激戦の地である。この年閏四月二十日、奥羽鎮撫総督参謀世良修造暗殺と共に、会津藩は白河城を占拠する。五月一日、東山道軍が奪還するが、以後、二ヶ月にわたってここで激烈な攻防戦が展開され、戦死者を多く出した。敗れて後、虜囚としてその激戦地を通る彼らの心情は想像するに余りがある。「応懲日札」には、梯次郎がこの時作した詩が記されている。

低地頑雲暗月光	地に低く頑なる雲、暗き月光。
敗余誰駐姓名香	敗余、誰か姓名の香をとどめん。
生為降虜何堪過	生きて降虜となる。なんぞ過ぐるに堪えん。
即是親朋戦死場	即ちここは、親朋戦死の場なり。

落々乾坤余亦人	落々たる乾坤、余もまた人も。
悠々閑過卅余春	悠々として閑過す、三十余春。
経綸滿腹用無地	経綸は腹に満ても、用ふる地無し。
留与児孫済此民	児孫に留め与へん、この民を済さんことを。

児に与ふ

後に前者は、改作されて、梯次郎の絶唱の一つとなる。(十九日、氏家の項参照)

白河には、盛岡藩主南部利剛らを東京に護送した帰途にあった秋田藩士らも宿泊していた。盛岡藩は、奥羽列藩同盟の盟約に基づき七月二十七日出陣、秋田総督府を攻撃、若松城開城後も激戦を続け、領内

に西軍が侵攻する以前の十月十日開城している。藩主以下重役らは、松平容保らと同じく十一月に東京に召喚されており、秋田藩士はその時の護衛兵達であったのである。ここは、あれこれ、悌次郎ら会津藩士に悲痛、悲愴な感情を抱かせる場所であった。ところがこの秋田藩兵が、彼らの道程を狂わせることとなった。十六日は快晴だったが、白河宿の人は足はすべて秋田藩兵の帰郷のために徴用されていて、彼らを出発させることが出来なかったのだ。やむなくもう一日ここに逗留することになったのだが、悌次郎は同宿していた井深・辰野・春日らと、好天氣を幸い「鹿肉を煮て酒を斟む」とある。夜には、隊長も酒と肴を持って慰労のためにやってきた。この間彼は、自分の詩を揮毫し、護衛兵を通じて旧知の白河藩家老の鈴木七郎兵衛に送り届けた。子供のための詩を書いたり、「且つ飲み且つ録す。同宿三子、余と興を催し一時囚情の苦を忘る。」と、一時とらわれの身であることを忘れる程の気分だったことが分かる。

十二月十七日 にぎりめしを持って白河を出発。うわさでは、白坂で住民の一揆が発生していて、昼食をとる場所がないというのだ。悌次郎らが白坂に着いた時には、町中は静かで騒ぎのある様子は見えないが、ここから一里程離れた新田という地区に、二千人ほどの住民が集結しているということだった。そのため中継ぎ人足が徴発出来ず、そのまま白河の人足に芦野まで送らせている。

松平定信が奥州白河藩主だった頃植え、鬱蒼と繁茂していた奥州街道の松並木が、すっかり切り払われている。今回の戦乱中、西軍がこの辺りに野営して伐採し、篝火としたからだだが、これをみた悌次郎は、それだけではなく、混乱に乗じて住民が勝手に盗伐したのではないかという。庶民を「土民」といい、「奸民」というこの辺りの言葉遣いを見ると、悌次郎の意識が、あくまで知識人である支配階級士族中心の視点で貫かれていることが分かる。

白坂で彼らは、戊辰戦争後の朝廷の裁可が終わって、東京から国元に戻る途中の三春藩主秋田映季一行に遭遇している。三春藩は、奥羽列藩同盟に所属していたが、西軍に攻撃される直前降伏して板垣退助軍を受け入れ、七月下旬からは西軍の先兵となって戦っていた。そのためもあって論功行賞の結果、三春藩は旧知五万石の内一万石を削られるが、別に二万石を与えられ六万石となっている。そのことを一行から告げられた悌次郎は、事の真偽については「果して然るや否。」と疑問視している。

この日の行程は短く五里（約二十キロ）、午後三時頃、芦野に着いた。旅程が短距離だった理由を彼は、護衛する小倉藩士らが、歩行で銃を持って行進し、なおかつ夜は寝ずの番についているので、草臥れたからだろうと推察、鋭い観察眼だといえよう。この辺りからようやく旅行者を見るようになったとある。観察の目は、旅行者にも向けられているのである。

十二月十八日 快晴 越堀で昼食、午後三時頃太田原に到着。護送される会津藩士は、若松出発の際一番から十三番まで序列をつけられ、道中その順序が守られていた。そのため、近い順番の者とは面会同宿することがあっても、離れたもの同士はなかなか会う機会がないのが実情だった。その中で悌次郎は、行歩自在で、誰共会うことが出来たという。この日は行進中に、海老名・小森と会っている。

太田原城下は、今度の戦争で兵火にあっており、宿は仮建築、器物も間に合わせ、さすがに悌次郎も同情の念を禁じ得ない。ここで悌次郎は、面白い経験をする。宿で鰻を注文したときのことである。主人が支払いは札か金かと問う。金だと答えると、それならいいという。官軍の御用だから、札でというところだと断られるところだったのである。なぜか。官軍の支払いはすべて札であるが、この札はこの辺りでは流通せず、やむなく東京に持っていくって金と交換すると、手数料に三割と

られ、大赤字だというのである。宿の主人が、宿料が僅かに三百文にしかならないというところ。公定価格がいくらであったか、今知る手がかりはないが、紙幣が不評だった様子がよく分かる。

この日悌次郎は、ようやく風邪が治り、初めて風呂呂に入ることが出来た。

十二月十九日 佐久山、曾根田を経て喜連川にて昼食、午後四時過ぎ氏家到着。この日は温暖で歩きやすく、辺りの景色も麦の芽が大きく伸び野菜の彩りも鮮やかで、白河までの様子とは全く異なっている。この日諸藩の急使がはせ違うち、帰国途中の米沢藩の支封米沢新田一万石の藩主上杉勝道の一行や、郡山にあった守山藩二万石の藩主松平頼升の一行と行き違う。上杉家一行は軽装、松平家は兵士同行、いずれも国元に帰る途中らしい。天皇は今月上旬、京都に戻られたという噂を聞いた会津藩士達は、自分たちの裁判は済んでいて、行けば判決を言い渡されるだけだと話し合った。護衛兵は皆疲労困憊、そんな中で一人がこっそり悌次郎にウサギをくれたので、それを酒の肴に同宿者一同盛り上がったという。この時、悌次郎は、柳田氏が和歌を詠んだのにつられて和歌を一首ものし、さらに詩も賦している。

喜連川わたるもいとどこころよし 清く流れて行かんとぞ思ふ

一去元期不復還 ひとたび去つて、元よりまた還るを期せず。

丈夫何事涙潜々 丈夫何事ぞ、涙潜潜。

老親臥病年将百 老親病に臥し、年まさに百。

夢繞那須山外山 夢は那須山の外山を繞る。

寄弟

恢復誰能奏偉功 恢復し誰かよく偉功を奏せん。  
従容就死亦豪雄 従容として死に就く、また豪雄なり。

殊恩涓滴未曾報 殊恩涓滴もいまだかつて報ぜず。  
留得二兒我侍公 留め得たり二児、我は公を待たん。

寄当路諸賢

当路の諸賢に寄す

「弟に寄す」と添え書きのある詩は、先に見たとおり、白河における感懷と併せて戦後の述懐の絶唱として知られている。<sup>注2</sup>「当路の諸賢に寄す」とある詩は、自分を裁く立場の人に対しての述懐ということであろう。「涓滴」は、「けんてき」、しずくのこと。こと志と異なりとらわれの身となった自分の運命を甘受し、君公への報恩が全く出来なかったことを詫び、二人の子供に未来を托したいと結んでいる。

悌次郎の漢詩はよく知られているが、この道中では後にもまた和歌を詠んでいる。彼の文才の豊かさを示すものとして注目される。

十二月二十日 午前七時頃出発、白沢で昼食、午後三時頃宇都宮着。ここも兵火にあつて市街地は焼尽、新造復興のさなかであつた。仮設で、ちまいました家が多かつたが、都会風に洗練されているというのが悌次郎の見立てである。氏家を出るとき、彼らは軽装で帰国する米沢藩主上杉齊憲の一行とあつている。路次、米沢藩士や上杉家の荷物を運ぶ一行とすれ違い、米沢藩は七万石を削られたといううわさも聞いている。(実際には、四万石削減。)米沢藩は、戊辰戦争の際、会津藩とともに戦い、戦争末期に悌次郎は、手代木直右衛門と共に、和平工作のために出向いていったところであり、その動向は人ごとではなかった。宇都宮では、新政府の裁判結果がわかり大騒ぎとなつた。前夜米沢藩の一行が宇都宮に泊まつており、宿の主が、処分内容のメモを見せてくれたからである。

これを見るに、所罰十数項。初条我が老公なり。永く池田中将に預けらる。当公は有馬氏へ御預けとなり、又保科侯に命ぜらるる旨あり。余が藩反逆首謀の者糺明申し出づべしとなり。四名相見て色を失す。仙米以下削封各等あり。条書別録。

別紙とある部分には、

死弔等被滅池田中将へ永御預

松平容保

同断 有馬中将へ御預

松平喜徳

松平家来の内叛逆首謀之者早々取調可申出

保科弾正忠へ

以下各氏の処分内容が列記されている。この部分は、後に千住から家族宛に送られた手紙の中に同封されて今に伝わったもので、列藩同盟関係諸藩の様子は、だいたい正確に伝えられていると云えよう。彼ら<sup>が</sup>色を失ったのは、藩公父子の処罰と共に、上総飯野藩主保科正益に對して叛逆首謀者の糺明を命じた一節があったからで、今まさに上京中の彼ら自身のことと思われたからである。この情報は、早速同行の各氏に告げられた。この日、東京が近いというので、彼らはめいめい必要な物資を買い求めたとある。この日も護送隊長からは酒肴<sup>さく</sup>のもてなしがあった。

十二月二十一日 くもり。雀宮にて昼食。午後三時頃小金井着。この辺りから、各藩藩士の往来が盛んになってきた。ここでは、旧知の石川主税についての情報を、宿の主人から聞いて安心した様子<sup>が</sup>うかがわれる。彼は、二十年來の悌次郎の友人だったが、同僚の三沢某の奸計により土地のすべてを失う羽目になって、関係筋に訴えていた<sup>が</sup>うまくゆかず、京都に居た悌次郎を訪ねてきたことがある。その後どうなっているのか気がかりだったのだが、彼は復権して郷里に戻り、三沢某は吟味中であることが分かった。たまたま宿の主の親家というこ

とで、主に手紙を托している。  
十二月二十二日 晴 間々田にて昼食、午後三時頃古河着。ぬかるみが続くが、役夫は巧みに輿を操る。悌次郎も輿になれてきたので、輿に乗って移動している。一行の中に、連行される会津藩士達の連絡役兼世話役として連れてきた長蔵という役夫がいる。彼は戊辰戦争当時

から、藩の役夫として江戸にも何度か行っている。人当たりがよく、護衛兵にも受けがよくて、一行の中に溶け込んでいたのだが、この日、悌次郎らに、「自分は、千住まで皆さんを送ったらすぐさま猪苗代に戻り、皆さんの無事到着を報告したいと思うので、御家族のためには非手紙を書いて下さい。必ずお届けします。」と告げたという。悌次郎の手紙の中に、東京到着の直前大塚で息男浩之丞に宛てた手紙と、東京着の前夜千住で第三郎宛に書いたものが残されている。文中、長蔵に托してとあり、長蔵が信用するにたる人物であることを詳しく述べている。これらの手紙については、項を改めて取り上げることとしたい。

また、長蔵は、この地方は鰻の産地だから、酒の肴にするといいて、沢山の鰻を差し入れた。敗戦後官賊扱いを受けている会津藩士と、彼らに仕える下男との身分を超えた交流の様子が分かるエピソードである。

この鰻は、たまたま病氣中だった護送隊長伊東主馬助の病氣見舞に使われることになった。旅を重ねるに随って、護衛兵と悌次郎らの間には、親密な関係が出来上がってきた。はじめのうちは、排便、入浴時にも衛士が同行していたが、この頃は、全くそういうこともなくなり、連夜菓子あるいは酒を振る舞って、疲れを癒やしていたが、隊長にだけはそうしたことをしていなかった。この際だからと同宿の藩士らと相談して決めたというのである。この日はたまたま節分に当たっていたので、宿の主が出してくれた炒り豆を、それぞれ年の数だけとり、何時もするように紙に包み体を撫でて健康を祈るということもあって、一同すつかりくつろいだ気分になっていた。ここでも悌次郎は、和歌を詠んでいる。

咲きさかる花も散る時散ればこそ 大和心と人はいふなり  
本居宣長の、

敷島の大和心をひととはば あさひにほふやまさくら花

を踏まえた歌で、訳の必要もあるまい。敗戦後の自分の位置を見据えた心境がよくあらわれているというべきだろうか。

十二月二十三日 栗橋にて昼食、午後二時頃幸手に到着。この日も興で出発したのだが、途中一葉松下で倅次郎は興を下り、海老名郡治の興近くに行つてこれまでの記録を読ませている。即ちこの日記である。河井継之助の『塵壺』には、旅先で同宿したとき倅次郎が、毎日のようにメモをとっていたとあるが、ここでも日々彼は記録をとっていたわけで、彼の筆まめさがよく分かる。この時海老名は、この道中他の家老らと一度も会っていないので、東京で尋問されたとき、それぞれが勝手なことをいつて話が齟齬してはこまる、小森一貫斎に、千住で一同同宿出来るように取りはからわせたいと倅次郎にいつている。

途中利根川を渡る。旧幕時代川越えには厳しい制約があった。諸国漫遊したところのある倅次郎にとっては、身に覚えのあるところであるが、今回の渡河は番所の監視が非常にゆるやかだと記している。こういう何気ない日常の中に時代の変遷を読み取っているのである。これまで倅次郎は、道中の風景を描写することはほとんどなかったが、この日は、珍しく自然の風景にも目をやっている。利根川を渡り景色が一変したからだろうか。利根川を渡ると、暖かさが体に染み渡る。梅が満開で、護衛兵の一人が一枝折つて倅次郎に贈った。

堤上右に富士山、左に筑波山、

芙蓉雪白、天半に聳えて巍然たり。筑波遥碧、峨々八州の野を圧するの勢あり。両山遥に対峙して余等降人の過ぐるを笑ふに似たり。と、大自然の中に自分たち一行を捉えている。

この日幸手の宿へ伊東隊長が来訪した。彼らが千住での一同の同宿を依頼したところ、彼自身そのことは考えていたが、既に小森一貫斎より頼まれ、ここでもまた頼まれ、もちろんそうするつもりだという答

が返つて来たという。

その夜のことで、倅次郎・佐川官兵衛・諏訪伊助らが晩酌を楽しんでいるところへ、海老名郡治・小森一貫斎が突然尋ねてきた。隊長が何か話があればいつてもよいといったので来たとのことで、酒を飲みながら着京時についての打ち合わせをすることが出来た。隊長の配慮がよく分かるエピソードである。倅次郎は、この夜、急ぎの旅を続ける人々の物音を聞きながら、ふるさとの母の言葉を思い出す。

君がためおくるはあしく いそぐとも時にあたるぞ我が心なり  
母が常に、何かあると自刃しかねないと、倅次郎の身を案じていたのを思い出している述懐であるが、時に応じた出処進退こそ自分の願いであるという気持ちがよく表れている。

十二月二十四日 くもり 春日部にて昼食、大沢に泊まる。途中雨となり、護衛兵は雨合羽を着けた。この時一行は、羽後本庄藩主六郷正鑑(二万二千石)とすれ違い、別に松前へ弾薬が送られてゆくのをしている。本庄藩は秋田藩と共に、七月列藩同盟を離脱して西軍に与して攻撃を受けたため、城をみづから焼いて各地を転戦していたが、十月になつて自領を恢復、六郷正鑑は国元に帰る途中だった。松前行きの弾薬は、いうまでもなく函館攻撃のためである。北海道における戦争はまだ始まったばかりだった。この時、松前藩主の通過を目撃したという記事もあるのだが、これはどういうことだろうか。松前藩は、榎本軍の攻撃を受けて十一月五日落城、藩主松前徳広は津軽領に逃れそこで病没しており、徳広の子修広が家督相続を許されたのは明治二年一月のことである。松前一族の誰かが、東京から現地へ急遽下向したのかもしれない。そういう落ち着かない世情が、こうした描写の中に垣間見えてくる。

この宿は、倅次郎が江戸に出るときの定宿だったので、同情した主人が酒肴を出して慰めてくれたという。藩士達は、手紙を書いたり衣

服を買い求めたり、東京での生活に備えている。彼もこの時、息子の浩之丞宛に手紙を書いている。<sup>○まき</sup>

十二月二十五日 明け方ひどく寒く、戸を開けると一面の積雪。朝酒で寒さを紛らわしたとある。以前から佐川官兵衛の提案で朝酒をしてはいたのだが、この日はこれまでの中で一番多く飲んでいる。午前十時頃氷雨の中を出発、草加で昼食をとり、風雨激しく寒気きびしい中午後四時頃千住着。

旅の最終日である。寒さを忘れるためとはいえ、朝からの飲酒に驚かされるが、実はこれ、以前から習慣になっていたという告白がついている。千住の宿では以前護送隊長に依頼したとおり、護送されてきたもの全員同宿が許された。そこに、東京から小林平角と大堀藤八がやってきて、容保と喜徳の平安を伝えた。また彼らは、裁判の記録を持参、宇都宮の宿の主人が内々見せてくれた内容と同じだと改めて確認している。ここで悌次郎は、これまでの旅を振り返り、心境を和歌、漢詩として残した。

姉二人に宛てた和歌二首、

都路ははや春めきにけり梅柳 花もろともにさきがけぞする

小姉へ

年老いし親はあれどもこの末は 君をたのみに先がけぞする

大姉へ

戦後処理の先駆けとなる覚悟を歌うこれらの歌は、あえて訳をするまでもないだろう。

一方詩においては、

奔馳元合達東京

鄭重檻車故緩程

一行肅々今唯到

拝了二公拜帝城

奔馳してもとあひ東京に達す。

鄭重なる檻車ことさらに緩程。

一行肅々として今ただに到る。

二公を拝し了りて帝城を拝す。

【大意】 奔走してきた仲間と東京に護送されるが、囚人を乗せた車は、ゆっくりと進み、一行は肅々とたた今到着した。容保、喜徳二公に相まみえ、その上で皇居を拝することにした。

これとは別に護送してきた小倉藩士らに謝意を表した詩もある。

小興載夢々悠々

小興夢を載す、夢悠々。

亦似尋常一樣遊

また尋常一様の遊に似たり。

高誼此行何以謝

高誼この行、何を以つてか謝せん。

旅魂他日到豊州

旅魂、他日豊州に到らん。

【大意】 小さな興は夢を乗せてゆく。夢は悠々としている。まるで普通の遊樂の旅のようだ。この度の並々ならぬよしみには、どうしたら感謝の意を表せようか。心は、いつか皆さんの故郷豊前小倉へと向かう。

明日朝七時に出発、東京に送り届けられれば小倉藩士の任務は終わる。隊長伊東主馬助は、悌次郎一行に酒肴を贈って長旅を慰労、さらに宿舎を訪れて杯を交わし歓談して最後の夜を共にしている。

酒宴の後悌次郎は、例によつて筆を執って手紙を書き、記録を綴る。

大凡この行小倉藩隊長以下余輩を遇する、懇切丁寧を極はむ。而して宿費輿料は官軍府の給する所なり。

時書を作り終れば已に五更に下り、此に筆を擱す。

秋月胤永手録

五更とあるから、翌朝午前四時を過ぎている。大塚での手紙に引き続き、千住でも彼は故郷への長文の手紙を書いている。それによると、文中に「右長藏と申す男は、この道中悉皆世話に相成候間、御逢の節よくよく御謝し下され度候。此日記全く貴様の存寄を以御局御軍事方等へ内見も苦しからず候。如何にとなれば途中の都合相わからず定めて御一同の御案思と存ぜられ候。」とあり、この日記、即ち「応懲日札」は、この手紙と共に、第三郎の元に届けられており、会津藩の各

方面に内見させていることが分かる。日記ばかりではなく、事細かに自分の動静を家族に伝えようとする彼の姿が、筆を置いた時間によって分かってくる。この後に、隊長伊東主馬助以下、彼らを護送してきた小倉藩士三十八名を列記、この外に役人数名、医師一人が同行していたという。召喚された会津藩士十一名に対して、警護の人数は合計三十八名である。初めに悌次郎が記した通り、会津藩士一人につき三名ないし四名がついたことになる。役人というのは政府のスタッフである。輿をになう人夫を始め、荷物運びの継ぎ立て人足も、想像以上に多人数だったと思われる。この旅、必要経費はすべて官費だという。戦後処理の費用は、意外なところでも発生しているのである。いづれにしても、医者も同行したこの一行は、賊軍とは云え非常に丁重に扱われている様子を知ることが出来るのである。悌次郎の感慨も当然といえる。

### 結びにかえて

こうして会津若松から千住まで十八日間、二百五十五キロの旅は終わった。東京まではあと十キロ、そこでは、新政府の尋問が待っている。途中百姓一揆、戦後処理のさなかにある東北地方諸藩の藩主一行の下向や箱館戦争の影響をもろに受けながらの旅であった。刀を取り上げられて、丸腰の屈辱の中にありながら、折に触れて詩を賦し、和歌を作り、虜囚の身であるとは思えない悌次郎の旅の振る舞いである。悌次郎の鋭い観察眼は、宿駅のたたずまいの背後にある現実を見通し、旧幕時代と比較しての現代の政情分析にまで及んでいる。厳重な警護の中にあつた彼らが、護送する側の藩士達と親密の度を増し、旅を重ねる中で歓談し酒食を共にし、交流が深まっていく様子が、日々の記録によって分かってくる。敗者でありながら、この旅を続ける一行の雰囲気には、暗さを感じさせられることがない。これは先に記したように、国元に届けられたとき、留守家族にも公表されるとい

う可能性があつたことにより、ことさら暗い話題を避けたということがあつたかも知れないが、そればかりではなく悌次郎の楽天的な思考のしからしめるところも多分にあるように思われる。いづれにしても悲壮感が感じられないのは確かである。勝者と敗者とに分かれているのに、戦場で相まみえたときとは異なる関係が、出来上がっていたことは間違いない。千住から長蔵に托して、第三郎の元に手紙と共に届けられたこの手記は、幕末維新期、戊辰戦争の大きな流れの中に生きていた人々の息吹を伝える興味深い記録ということが出来よう。

二〇一二年十一月十一日

注1 次三氏編纂の筆記録には、別に『謹慎地よりの韋軒伯書簡 写』があるが、これには「応懲日札」は含まれていない。「応懲日札」は、昭和九年発行の「会津史談」第八号に翻刻掲載されており、後に、「会津戊辰戦争史料集」(宮崎十三八編、一九九一年新人物往来社刊。)に再録された。一方、次三氏の後を継いだ一江氏は、平成二年十月発行の『秋月悌次郎詩碑建立記念誌』に収録されている「秋月悌次郎略伝」(本文中には執筆者の記名はないが、文中挿入されている写真等の関係から、この文章の筆者は、明らかに一江氏である。)中、「悌次郎ら、東京の獄に送られる」という章や、平成十年十月に刊行された『秋月悌次郎伝』の第二十章「秋月胤永東京に行く(応懲日札)」にそれぞれ解説付きで抄出紹介された。

注2 これらの詩は、『韋軒遺稿』中では、次のようになっている。

十二月与佐川官兵衛海老名	十二月、佐川官兵衛・海老名郡治・井深郡治井深茂右衛門等十一人	同赴東京。小倉藩兵護送之。
過白河所得。	小倉藩兵これを護送す。	白河を過ぎ得る所。

一去元期不復還。

丈夫何事淚潛潛。

老親臥病年将百。  
夢繞那須山外山。

落木悲風黯月光。

中宵揮淚起彷徨。  
生為降虜豈堪過。

即是親朋戰死場。

前者は、十九日の条に見る「寄弟」と添え書きのある詩、後者は白河における述懐、「児に与ふ」とある内の一つを改作したもの、応懲の旅の途次の感懷を、激戦地白河に焦点を当てて集中的に表現した形になっている。倅次郎の詩作の方法が分かる好例である。

注3 次三氏は、この日の記事の後に、「諸侯処分内容」として別紙の写しを挿入し、「江戸へ送らるる途中宇都宮にて聞込まれしを千住より長蔵に托して書信に添へて三郎に送られしものなり」と注記している。別紙は以下の通り。

死壺等被減池田中将へ永御預 松平容保  
同断 有馬中将へ御預 松平喜徳  
松平家来の内反逆首謀之者早々取調可申出 保科弾正忠へ  
式十八万石下賜仙台城御預 伊達広邦  
拾参万石下賜土地替被仰付 南部利剛  
領地之内千石被下上隠居 南部信氏  
五万石下賜二本松城御預ケ 丹羽長国  
丹羽長国儀別紙之通被仰付候に付其方邸内へ引取謹慎可為致  
一橋大納言  
右同断一橋へ御渡可申事 松平大和守  
六万石下賜棚倉城御預ケ 阿部正静

二千石被召上土地替被仰付  
同断

三千石同断

千石同断

土地替被仰付

永蟄居

四万石召上嫡子茂憲へ家督  
拾式万石被下置

二千五百石被召上

謹慎

二千石被召上

三千石被召上

二千石被召上

二万五千石下賜長岡城御預  
隠居

隠居

千石被召上隠居

謹慎

五千石被召上隠居

小笠原中務少輔へ永御預

土地替

板倉勝尚

本多忠紀

田村邦栄

内藤政養

内藤対馬守

同

上杉斉憲

酒井忠篤

酒井忠良

水野和泉守

織田信敏

松平信庸

岩城隆邦

牧野忠訓

堀直賀

水野勝知

内藤信思

久世広文

林忠崇

牧野伊勢守

右は総辨文言長き爵文之處大畧に録す尤も仙米始首謀者取調可申出と也

注4 十二月二十四日付けの浩之丞宛手紙の原本は、秋月一江氏が翻刻紹介された際失われていまはない。ただし、次三氏の手になる写しが残されており、文中に、

この度長蔵と申仁付き参り始終親切の世話に預り、道中の様子よく存候間、面会候はば、よく礼を被申述、可被承候。この状並に日記等叔父一同被致度候。明日は千住へ着、明後日東京京呉服橋辺軍務局と申に被送

届候よしに御座候。余は叔父の書状に譲りて、搦筆。極月廿四日 大塚  
駅にて認 父より

とあり、この当時の様子がよく分かる。この手紙の中で、日記とあるのが  
この「応懲日札」のことである。